編　集　後　記

この本（記録）はとても面白くて、変わっている。こんな本を見たことが無い、しかも大学の教員が寄ってたかって作り上げている。何故そう思うか？それはこの本の最初から最後まで「立教大学の授業」のことばかりが書かれているからである。関心の無い方には全く関係がないことですが、これはただ事ではありません。

最初の特集「進化する総合B」では青木氏の論から始まっています。「進化？」「深化？」「変化？」とタイトルを巡って話し合い結局「進化」に落ちつきました。ともかく前進し続けて行くこと、全体を巻き込みながら大きな流れになっていくことを「進化」と表現している。来年度から全カリ総合は「立教科目」「時事科目」などを含んで大きく姿が変わっていきます。どこまでいくのか誰も分からないけれど、一つ一つの全カリの授業構成に反映されていることを読者は確認できるでしょう。

さて、今号のもうひとつの特集は「授業評価」を巡ってのシンポジウムの記録です。久々に学生も大勢来たし盛り上がったという評判でしたのでその雰囲気の一端を感じ取っていただけるでしょう。何しろたくさんの学生が発言しているのでかなりの部分をカットすることになりました。学生は日頃大学や教員に対して感じていること（ほめ言葉よりも主に不満の言葉ですが）を発言する良い機会であるととらえたようでもあります。逆説的には「学生の声」を「授業評価」だけでなく、色々な場面で確認、聴取できるような関係やシステムがもとめられていると強く思います。

今年度の「大学環境調査報告書」によると全カリ関連科目についての充実度、例えば「この大学の言語教育は充実している」「情報関連科目の教育は充実している」という項目に対して、1996年度に比して大幅に肯定回答が増加している。このようにこれまでの努力が肯定されている部分に注目することが出来ますが、一方で「この大学は学生が不満を申し立てやすいようになっている」には75%が否定回答しているし、「教師は学生の能力を十分引き出している」には81%が否定回答している。まだまだ双方の努力のかみ合わせは微妙に届いていない。学生は求めるだけで努力をしていないとか、教師は学生の意欲を育てようとしていないという一方的決めつけよりも、そもそもコミュニケーションの場と方法が必要であるように思います。

佐々木氏が司会者としてその「場」「機会」の必要性について発言していますが、少なくとも今回のシンポジウムが双方のコミュニケーションの場としての意味を持ったということでありましょう。改めて感じるのは全カリという学習教育機構が大学教育の理念、内容、方法、そしてコミュニケーションについて全学で共有する場（フォーラム）としての機能を果たしていく可能性について認知されつつあるということです。（福山清蔵）